

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 99 号

平成 22 年 7 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

相沢良一

「黒潮の神学 上巻」(黒潮社)より(2)

三原山燃ゆ

「あなたがたは心を騒がせないがよい。神を信じ、また私を信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。わたしがどこに行くのか、その道はあなたがたわかっている。

トマスはイエスに言った。『主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道が分かるでしょう』。イエスは彼に言われた、『私は道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである』。ピリポはイエスに行った、『主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下さいれば、わたしたちは満足します』(ヨハネ福音書 14.1 - 8)』

1986（昭和61）年11月21日、三原山大爆発に伴う全島民の大脱出を、NHK取材班は次のように記載する。

「...火口がカルデラの噴火から麓の町を守っていた外輪山を越えたのだ。午後5時46分のことだった。6時前には外輪山を越えた火口が、展望台への有料道路に迫る。このころ新たな火口の数もカルデラの中に7個、外輪山の外では11個に及び、その長さは3キロに達していた。...6時半ころには外輪を越えた火口の一から溶岩が元町の方に流れ出したのだ。...そして避難の第1船、東海汽船の高速船シーホークが389人の観光客と住民を乗せて元町港を出港したのは、大噴火から3時間近くたった午後7時2分のことだった。災害史上未曾有の全員避難は、それぞれの人たち、それぞれの職場にとっても、一つのドラマだった。

島からの避難をためらった人は多い、元町にある大島元村教会の相沢良一牧師（69）。妻と次女が避難したあと、彼は礼拝堂の灯りを消し、じっとすわっていた。神学校を出たあと大島に来て41年。10数人の信者が今では百人に増えた。

「教会を守らなければならない。」

「町が守られるようお祈りすべきだ、残る一人くらい、いてもいいだろう」

その一方で「みんなに心配をかけるのはいけないかも知れない」二つの思いが交錯する。安否をたずねる電話だろうか、ひっきりなしにベルがなる、ふだんは意識していなかった三原山に、相沢牧師は初めて畏怖の念を抱いた。残るか、非難するか、心の中で葛藤が続く。遠くから「最後の船です、住民は全員乗って下さい」という放送がこだまのように流れてくる。知らず知らずのうちに元町港への道を歩いていた。「溶岩の迫った元町を見捨ててしまったのではないか」、「自分がここまで育ててきた大切なものを捨てて去ってしまったのではないか」。命令に従ったとはいえ、相沢牧師にはあとあとまで後悔の念が残る。

千代田区立総合体育館

筆者の最終的避難場所は、千代田区立総合体育館の3階であった、2階は町役場であった、ここに三百人の方たちと26日間寝食を共にした。当初は都内40数ヶ所に分散していた避難所も、その後25ヶ所に集約された。...さいわい階下が町役場であったので、おいおいと連絡網が拡大され、教会員全体の所在が確認できたのは12月9日であった。

第1回のわが牧会書簡を記す。...、神田のコピー店でコピーしてもらい、投函したのが12月12日であった。なにか一くぎりついた思いで、大手町の地下鉄より路上に出た時、冬の日はずっと暮れていた。此处から避難所まで、歩いて10分足らずであった。...この時であった。わが耳に甦ったのがじつはプレスリーの歌っていた「天上の星」であったのである。このためには、プレスリーとの出会いを語らざるを得ないのである。

筆者は、特別伝道集会の講師としてお迎えをいただき、特にこちらからお願いして讃美歌331番の「主にのみ十字架を負わせまつり、われ知らずがおにあるべきかは」を、説教のあとで歌っていただく事がよくある。自分としては、この讃美歌はなるべくゆっくり歌ってほしいのだが、早く歌うようにできているとみえ、どの集会でもこちらがついてゆけないくらい、早くうたわれている。うたの下手な筆者にとっては早いとどうも感動が半減する。

たまたま大島に来られた八千代台教会の大橋弘牧師にこのような話をしたところ、じつは、プレスリーがこの曲で歌っているとのことであった。感動がこもっていて、プレスリーを見直しました。お聞きになれば、先生もきっとプレスリーが好きになりますと、大橋先生からこのプレスリーのテープが送られてきたのであった。

まさに大橋先生の言われたただけのことだけあって、聞けば聞くほど感動がこみあげてくる。「黒潮」の発送作業中などは、手を休めることもなく、朝から晩迄一日中このプレスリーの歌に聞きほれてしまい、英語の歌詞もすっかりおぼえたし、その気になれば、テープ

を聞かなくても、あのプレスリーのすばらしい声が耳に響いてくるようになった。

この歌にはプレスリーの魂の苦悶と同時に、彼の主イエス・キリストに対する信仰の告白がこめられている思いがしてならなかったのである。あの大手町の地下鉄から路上に出た筆者の耳に響いてきたのは、このプレスリーの「オウ、プレッシャス、ロード、テイク、マイ、ハンド、リード、ミー、オン」と肺腑をえぐる声であった。このリード、ミー、オンのリ、ミ、オンというリズムが、思わず筆者の足を止めさせた瞬間、このヨハネ福音書第14章の「あなたがたは、心を騒がせないがよい、神を信じ、またわたしを信じなさい、わたしの父の家にはすまいがたくさんある、もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから」との聖句が、プレスリーの絶唱と重なっていたのであった。

これから8分も歩けば、あの体育館の3階にわが住まいが備えられているのではないか。おいしい仕出弁当も用意されているし、家内と二人分の2枚のうすべりの空間も確保されているのだ。そうだ、其処はまさに「狭いけれど楽しい我が家」ではないか。

その晩、2通の文書を草した。1通は「狭いけれど楽しい我が家」と題し、朝日新聞の「声」欄に、今1通は「伊豆大島より避難して」と題し、岩波書店の「世界」に投稿した。朝日新聞のほうは「避難所生活も馴れれば楽し」とされ、翌日の朝日新聞に、岩波の「世界」のほうは、次の2月号に掲載された。その数日後に、筆者の避難所の生活がNHKより放映され、多くの方々にご覧いただいたようであった。

伊豆大島より避難して（「世界」昭和62年2月号より）

筆者は当初より此処、千代田区立総合体育館において、約三百人ほどの人々と共に、集団生活を送っている。一同の者は不自由な生活の中で、暖かい援助の手を感謝しつつ、極めて平穏な日々を送っているのが現状である。

これは結論ではあるが、あのまま全島民が大島に残っていたとしても、一大惨事にはならなかったのである。溶岩流は、元町の火葬場手前で止まっていた。しかし、あの11月21日夕刻の時点において、緊急避難命令が発せられたのは、行政をあずかる者の必然的な決断であったのである。

われわれ島民としては、噴火予知連のその都度の発表に関しては、振り上げた拳のおろし方にいささか苦しんでいるのではないかとの見方もないわけではなかったが、あくまでも、人命尊重を優先しておられるその在り方に対しては、敬意を抱かざるを得なかった。

三原山大噴火に対してとられたこのような行政の在り方が、この国の民生と平和の在り方に新しい影響を及ぼすことを祈って止まない次第である。筆者は大島脱出の際、机上に山積していた未整理の郵便物二百数十通余りと、4冊の住所録をリュックにつめただけであった。

此処の避難所生活も20日近くになった。引きも切らない電話、お見舞客の応接、それに午後からは各避難所に分散しているわが教会員の安否を問うために、一日一日が戦場に在る思いである。ようやく一息つけるようになって、はじめて手にしたのが「世界」の1月号と、岩波文庫の「創世記」と「蘭学事始」の2冊であった。

このような避難所生活は、いくら味わいたくても味わい得ない。夫婦ふたりで2畳の空間。蒲団を片づければそこが食堂にもなれば、書斎に早変わりする。食堂は段ボール箱、机は知人から届けられた小さなお膳である。このお膳ですでに数百通の手紙を書いた。

住めば都、狭いけれど楽しい我が家である。」（12月12日）

机上との戦い

昨秋 11 月 3 日に大島をたち、4 日より 7 日まで鹿児島県は国分教会、鹿屋の野の花教会、串木野教会、阿久根めぐみ教会、8 日は北九州市の小倉東篠崎教会、9 日より 13 日まで下関教会、14 日朝姫路福音教会にお寄りして、14 日夕刻には大島に帰ってきた。12 日ほど留守にしていたので、机上は文字どおり手紙の山になっていた。悦子が日付順に束ねてくれたものが 10 束もできていた。帰島の翌日、三原山が噴火を始めた。何か身边がにわかに慌ただしくなった思いで、お世話になったそれぞれの先生方にお礼状を認めるのがやっとであった。三原山の方に気を取られてばかりいては机上が片づくはずはない。

それから 6 日後の 11 月 21 日夕刻、午後からの震度 4 ないし 5 の連続的な地震に伴う噴火口の大爆発により、一万の全島民が 1 夜にして大島を脱出するという劇的なドラマが展開をしたのであった。

緊急避難命令を拒むすべもなく、筆者がリュックに詰め込んだのは、例の机上に山積していた未整理の二百数十通に及ぶ郵便物と、二、三の教会の重要書類、後は 4 冊の住所録だけであった。悦子は会員名簿を 2 冊持参してくれたので、避難所では、それが自分役に立った。こちらよりは、彼女の方が遥かに牧会的能力がある。

われわれの避難所にあてられた千代田区立総合体育館 3 階で、午前中の時間はほとんど大島から持参したこれ等の郵便物の整理で費やされた。12 月にはいると大島あての郵便物が転送されてくる。それらの中には、関係諸団体のクリスマス献金の依頼文書もおびただしかった。それに、こちらの避難先が伝わるにつれ、お見舞や安否を問うお便りが増えてきた。大島帰還にさいし、再びわがリュックはこれらの郵便物でいっぱいになった。

大島航路の再開にともない、それ迄東京に滞貨していた「黒潮」第 325 号 10 梱包が 12 月 24 日朝になって届いた。当日はクリスマス燭火礼拝がある、朝から放送局や新聞社の取材の応接に暇がなく、たいへんな騒ぎであった。

「黒潮」発送用の封筒は印刷してなかったので、まず三千枚に及ぶ宛名カードの印刷から始めなければならない。これだけでも2日間にかかる。悦子共々不眠不休、まさに、人事ヲ尽クシテ天命ヲ待ツの思いで、暮の30日までに、何とか発送の方は片づいた。

あと一日ある。走れ！メロス。31日は一日中死物狂いで配達に廻ったが、ついに、二百軒ほど配り残してしまった。それでもお正月はやってきた。掃除もなにもあったものではない。われわれが帰島した日から郵便物は配達されるようになったので、みるみるうちに机上手紙の山になった。いよいよ元旦の早朝から山積した机上手との戦いが開始された。1日最低50通が自らに課したノルマである、祈りつつ書き、書きつつ祈る明けくれがつづいた。当初はこちらの認めるお礼状よりは、いただくお便りの方が多かったが、おいおいとこの関係が逆転するようになったものの、まだ当分は机上手との戦いは続くであろう。...

電話でと、考えないわけでもないが、親しい方々なら、電話でも良いが、はじめての方々には気おくれがする。ハガキに印刷したものはわが性格に合わない。やはりいくら遅れてもいましては、このまま1日50通の自らに課したノルマを果たす以外に、よい方法はないようである。

「すると」についての一考察

そもそもこのようなわが大島伝道と原動力になったのは、使徒行伝第 18 章に記されている使徒パウロのおけるコリント伝道のビジョンであったのである。当時はまだ聖書は文語訳の時代であったので、文語訳で記載する。

「シラスとテモテとマケドニヤより来りて後は、パウロ専ら御言を宣ぶることに力め、イエスのキリストたることをユダヤ人に證せり。然るに、彼ら之に逆ひかつ罵りたれば、パウロ衣を払ひて言ふ「なんじらの血は汝らの首に歸すべし、我はいさぎよし、今より異邦人に往かん」。遂に此處を去りて、神を敬ふテテオ・ユストと云ふ人の家に到る。この家は会堂に隣れり。会堂司クリスポその家族一同と共に主を信じ、また多くのコリント人も聴きて信じ、かつバプテスマを受けたり。主は夜まぼろしの中にパウロに言ひ給ふ、『おそるな、語れ、黙すな、我なんじと偕にあり、誰も汝を攻めて害ふ者なからん。この町には多くの我が民あり』かくてパウロ 1 年 6 か月ここに留りて神の言を教へたり。」

使徒パウロのこの志に触発され、百万の援兵を得た思いでいた 2 年後、新約聖書は口語訳に改訳された。...

「すると、ある夜、幻のうちに主がパウロに言われた「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大勢いる」。パウロは 1 年 6 か月の間ここに腰をすえて、神の言を彼らの間に教えつづけた。」...

当初のコリント伝道は、使徒パウロにとっては、失望以外のなにものでもなかったのである。彼は足の塵を払って、コリントの町を去りたいと思ったことであろう。だからこそ、この「すると」が、千鈞の重さを有していたのである。...かくて、パウロは「1 年 6 か月の間ここに腰をすえて、神の言を彼らの間に教えつづけた」のである。「ここに腰をすえて」。筆者の愛読の個所である。

第2講 聖書論

「この聖句より説き起こして」

宦官はピリポにむかって言った、「お尋ねしますが、ここで預言者はだれのことを言っているのですか。自分のことですか、それとも、だれかほかの人のことですか」。そこでピリポは口を開き、この聖句から説き起して、イエスのことを宣べ伝えた。道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官が言った、「ここに水があります。わたしがバプテスマを受けるのに、何のさしつかえがありますか」。〔これに対して、ピリポは「あなたがまごころから信じるなら、受けてさしつかえはありません」と言った。すると、彼は「わたしは、イエス・キリストを神の子と信じます」と答えた〕
...(使徒行伝 8 章 26-40 節)

このピリポは、ヘレニスト（ギリシャ語を使うユダヤ人）集団の一人でした。彼は、ゆくりなくも荒野で、ひとりのエチオピア人の高官に出会ったのでした。この高官は敬虔な人物で、ユダヤ教に帰依しており、過越の祭りごとにエルサレムの神殿に詣で、今しもその帰途に就いていたところでした。...

彼が読んでいた聖書の個所は「これであった」として、イザヤ書 53 章 7 節から 8 節が引用されています、いま、その 5 節を摘記しておきます。「しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。」

これが「主の僕のうた」とよばれている預言でありました。...この「主の僕のうた」とよばれる文書が成立したのは、この使徒行伝が記された当時からしても、五百年も昔でした。このような謎に満ちた「主の僕」こそ、実にイエス・キリストご自身にほかならなかったというのが、初代教会の信仰であり、この信仰こそ、初代教会のケリユグマ(宣教の使信)でもあったのでした。

この聖句より説き起こして(2)

「宦官はピリポに向かって行った、『お尋ねしますが、ここで預言者はだれのことを言っているのですか。自分のことですか、それとも、だれかほかの人のことですか』。そこでピリポは口を開き、この聖句から説き起こして、イエスのことを宣べ伝えた」

とあります、ここで言われている預言者とは、イザヤ書 53 章の著者を指しているのです。

初代キリスト教会は、主イエス・キリストの十字架の出来事を宣べ伝えるために、何よりも、このイザヤ書 53 章に預言されている、この「主の僕」をもってしたのでした。

ピリポに向かって、このユダヤ人の宦官は、いま自分が読んでいたイザヤ書 53 章の預言は「だれかが、手引きをしてくれなければ、どうしてわかりましょう」と答えております。

この使徒行伝第 8 章に続く第 9 章は、使徒パウロの回心記であります。迫害者からキリストの使徒とされたパウロは、「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である」(第 1 コリント 1 の 18)と叫びました。

主イエス・キリストの十字架の出来事は、だれかが手引きをしてくれなければ、語ってくれなければ、理解できないばかりか、むしろ、それは愚かとも思える出来事であったのでした。初代の教会は、十字架の主イエス・キリストを宣べ伝えるために、いま、わたしたちが、「旧約聖書」と呼んでいる当時のユダヤ教の経典を伝道の武器として、それらの経典に含まれている数多くの「聖句から説き起こして、イエスのことを宣べ伝えて」いるうちに、やがて初代の教会は、自らの教典を制定し、教会の独自の文書によって、主イエス・キリストを宣べ伝えたのであります、その教会独自の文書が新約聖書であったのでした。